

# John Donne の作品における 自己と他者の重なるイメージ

鳥養 志乃

John Donne (1572-1631) は様々なジャンルの詩作を行うだけでなく、カトリックからイングランド国教会に改宗後、聖職者となった人物である。その詩作品においては、自己と他者を重ねて扱うという題材が多く用いられている。本稿では、Donne の様々なジャンルの詩や散文に見られる「自己と他者が重なるイメージ」を取り上げ、そのイメージが Donne の宗教的な思索に深く関わっている事と、奇抜な表現を生み出していることについての指摘を行う。

## 1. 書簡詩、挽歌、瞑想録における人間と死―陸と海のイメージ―

この節では Donne の伝記を紹介しながら、書簡詩、挽歌、瞑想録に見られる自己と他者が重なるイメージを確認したい。特に陸と海のイメージが深く関わっている作品に焦点を絞って議論する。このイメージについては、陸が自己（作中の話者である詩人）を示すものであるのに対し、海が命を奪うものとして描かれているという点を指摘する。また、同一視される他者の対象範囲の変化や、それに対する態度の変化を、作品の創作年に沿って確認する。

Donne は 16 世紀のイングランドのカトリックの家に生まれ、イングランド国教会によるカトリック弾圧を身近に感じながら幼少期・青年期を過ごした。伝記によれば、カトリックであるがゆえにイングランド国教会へ宣誓を行わず、それを理由に通っていたオックスフォード大学やケンブリッジ大学で学位が修得出来なかったとされている。官僚への道を絶たれた Donne は、1597 年に当時のスペインの統治下にあったオランダへの遠征 (The Islands Voyage) に参加している。

Bald によると、Donne はこの遠征で一つのエピソード (“A Burnt Ship” 「燃える船」) 一つのエレジー調の恋愛詩 (“His Picture” 「僕の似顔絵」)、二つの

書簡詩 (“The Storm” 「嵐」、「The Calm」 「風」) の四作品を書き残したのではないかと考えられている<sup>1</sup> (pp.80-91)。その中の“The Storm” (「嵐」) は友人である Christopher Brooke に自身が死に直面した体験を報告している体裁をとっている。Donne は遠征の艦隊に乗り合わせていない友人に嵐の様子を次の詩行によって語り始めている。

Thou which art I, ('tis nothing to be so)  
 Thou which art still thy self, by these shalt know  
 Part of our passage;<sup>2</sup>

(“The Storm” ll. 1-3)

私である君よ、(このことは何の特別なことでもない)  
 君自身でも有り続けている君に、この書簡によって、  
 我々の航海の一部を知らしめよう。

(「嵐」)

引用の“Thou which art I” (1.1) という表現は、Donne と Brooke という友人二人の存在が違わない程に親密であるということを端的に表しているものであり、“shalt know/ Part of our passage” (1.3) の根拠にもなっている。しかし一方で、Donne は Brooke が実際には“Thou which art still thy self” (「それでも君自身であり続けている君」) (1.2) であることを述べ、この詩の締めでも“*So violent yet long these furies be/ that though thine absence starve me I wish not thee.*” (「嵐の風があまりにも激しくしかし長く続いているので、君の不在が私を渴望させても、私は君がここに居ることを望まない」 ll.73-74)

1 “A Burnt Ship”は海上での戦の様子を描いた詩であり、“His Picture”は出航前に陸地での恋人との別れの場面を描いた詩、“The Calm”は海上での嵐の後にやってきた風の所為で立ち往生をしたという苦しみを描いた詩である。“The Storm”も合わせ、オランダへの遠征について書いたこれら四作品の特徴は Donne が人間たちの戦いがもたらす死よりも、海上での嵐や風での日照りといった自然がもたらす死(や苦しみ)により興味を示している、という点である。

2 本論における Donne の詩作品の引用は Donne の詩作品の全集の中で最新版であり、他の編者による様々な詩集を参考してまとめられている Robbins 版に拠る。また、引用各所に見られる特殊な発音記号やウムラウト付のアルファベットに関しては、Robbins の版に依拠する。

と、彼らの存在が別物であることをはっきり認めている。しかし、「友人の不在に対する落胆と安堵感の相反する二つの感情」が同時に起きるのはやはり、“Thou which art I” (1) に表れている Donne の Brooke に対する自己と重ねあわせて見ている意識からであろう。つまり、自分と一体化しているように感じられているからこそ、長い航海において友人の不在は耐え難い物であり、しかし一方でそんな友人を命の危険が伴う嵐に晒すことは出来ない、ということである<sup>3</sup>。

そのような嵐に見舞われた船内は、“Some confined in their cabins lie, / equally/grieved that they are not dead and yet must die;” (「乗組員の中には船室で棺桶に横たわりながら、／彼らが死んでいないこととこれから死なないといけなことを同様に嘆いている」ll.45-46) と、死への絶望が蔓延するほどのものであった。乗員の一人である Donne がこのようにして命の危険に晒されたと言うことは、“Thou which art I,” (l.1) と存在が重ねられている Brooke も(理屈上では)命の危機に晒されたことになる。また、読み手であるはずの Brooke はこの表現があることによって、Donne が経験した嵐を概観するだけでなく、Donne の目を通して追体験することになり、つまり詩の臨場感が変わるのである。この書簡詩において、Donne が自身と他者 (Brooke) を重ねている表現を用いることで Brooke が嵐の様子を知ることができるような仕掛けを作り出しているのは、Donne 自身の目を通して体験を読ませることで読み手である Brooke に嵐の臨場感を与えるためである。

この書簡詩が書かれた後、同年に Donne は国璽尚書官である Edgerton 卿の秘書の職に就くが、1601年に彼の姪 Anne More と秘密裏に結婚したことにより、1602年に投獄される。同年に出獄するが、職のないまま長いこと不遇な生活を送る。このような不安定な時期を経て、1609年以降に書かれたとされる挽歌“An Elegy upon the Death of Lady Markham<sup>4</sup>” (「Markham 夫人に寄せる挽歌」)には、次のような詩行が収められている。

Man is the world, and death the ocean

3 “The Storm”の後に“*The Calm*”が書かれたとされているが、こちらの詩では同じ受け取り手である Brooke に対して自己と同一視している描写は見られない。

4 Markham 夫人は Donne のパトロンの一であった Bedford 伯爵夫人の叔父の娘である。(Robbins, 735)

To which God gives the lower parts of man.  
 This sea environs all, and though as yet  
 God hath set marks and bonds 'twixt us and it,  
 Yet doth it roar and gnaw, and still pretend,  
 And breaks our banks whene'er it takes a friend.

（“An Elegy upon the Death of Lady Markham” ll.1-6）

人間は陸地であり、死は海である  
 神はその海に低俗な人間という部分を与えるのだ。  
 この海は全てを囲んでいる、今のところは  
 神が印をつけて境界を作り我々人間と死の海とを隔てているが、  
 死の海は轟き、侵食し、危害を加えるような真似をし、  
 そして実際に堤防を壊してそこから友を連れ去っていく。

〔「Markham 夫人に寄せる挽歌」〕

Donne は Markham 夫人の死を悼むにあたり死を一般化するところから始めている。その過程で、死そのものは海として扱われ、神の摂理で隔てられているにも関わらずその海は人間という陸地を浸食し、轟き、荒れ狂う波が友を連れ去るものだと描写されている。描かれている海の様子は、穏やかな海ではなく、嵐の海であることは明らかである。故に、この挽歌は“*The Storm*”を意識していると考えられ、なおかつ視点が海にいる Donne のものから、陸におり“*Thou which are I*”である Christopher Brooke の視点すなわち陸地にいる人間の視点に転換されて描かれているという印象を受ける。さらに、“*The Storm*”から“*An Elegy upon the Death of Lady Markham*”に至る間に、陸地と海のイメージを用いて「人間」そして「死」の概念を一般化している。この挽歌の中では Donne が自己を重ねている対象は、友人である Brooke という一人の人物から、全人類にまで広がりを見せている。

Donne がこのようにしてこの詩の中で「陸地としての全人類と海としての死」のイメージを用いているのは、実のところ、彼のパトロンである Bedford 伯爵夫人の親族である Markham 夫人の特異性を際立たせるために他ならない。この後に続く詩行では、

In her [Lady Markham] this sea of death hath made no breach,

But, as the tide doth wash the slimy beach  
 And leaves embroidered works upon the sand,  
 So is her flesh refined by Death's cold hand.

(“An Elegy upon the Death of Lady Markham” ll.17-20)

彼女（Markham 夫人）に対してはこの死の海は攻撃を行わず、  
 かわりに、ねば土状の海岸を波が洗浄し、  
 砂の上に刺繍を施した作品を残していくように、  
 彼女の肉体は死の冷たい手によって浄化されるのだ。

(「Markham 夫人に寄せる挽歌」)

と、Markham 夫人に限っては死の海から肉体への攻撃を受けず、寧ろ浄化作用を受けるといふ。つまり、一般的な死が損害なのに対し、Markham 夫人の死は例外的な祝福として描いているのである<sup>5</sup>。

しかし、「全人類と共有し、なおかつ共に破壊される死」と「唯一の存在であり祝福される死」の内、Donne の宗教的思索に深く関わったのは前者の方であったと考えられる。この挽歌が書かれた翌年の1610年、Donne は散文 *Pseudo-Marter* (『エセ殉職者』) を出版し、その著書でカトリック教徒に James I に忠誠を誓うよう勧告している(様々な意見があるが、Donne は1605年ごろにはカトリックから国教会に改宗していたのではないかと考えられている)。この功績が認められ、Donne は学位を習得し、1615年にはイングランド国教会の牧師となっている。そこからさらに9年が経過した1624年には、*Devotion upon Emergent Occasions, and Severall Steps in my Sicknes* (『不意に発生する事態、および我が疾病の多くの段階に関する冥想録』) という著書の“Meditation 17”<sup>6</sup>の中で、「自己と他者の存在の重なり」

5 Donne はある実在した人物へ挽歌を贈る際、その人物を類まれなき絶対的な存在として扱ひ、なおかつその死の意味を誇張して表現することが多いが、その代表が13歳で亡くなった Elizabeth Duraly 嬢の死に対して書かれた *The First Anniversary: The Anatomy of the World* (『一周忌記念：世界の解剖』1611) と *The Second Anniversary: Of the Progress of the Soul* (『二周忌記念：魂の遍歴』1612) である。

6 散文作品の一部であるが、詩の愛好家達からは“*No Man is an Island*” (もしくは“*For Whom the Bell Tolls*”) という一つの無韻詩として多く扱われている。アメリカの小説家、Hemingway の小説 *For Whom the Bell Tolls* (『誰がために鐘は鳴る』) タイトルもこの部分からの引用である。

と「陸地としての人間の存在」という二つのイメージは、「大陸としての人類」という形で表現されている。

...No man is an *Iland*, intire of it selfe; every man is a peece of the *continent*, a part of the *maine*; if a Clod bee washed away by the sea, Europe is the lesse, as well as if a Promontorie were, as well as if a Mannor of thy friends, or of thine one were; Any Mans death diminishes me, because I am involved in Mankinde; And therefore never send to know for whom the bell tolls; It tolls for thee.<sup>7</sup>

(“Meditation 17”)

……人間は自分自身だけで完全な存在を成す孤島ではない。全ての人間は大陸の一部、主たる土地の一部分である。もしも土壌の一部が海によって流されれば、ヨーロッパは小さくなる、断崖が流される時と同じように、汝の友人の領土と同じように、もしくは汝自身の領土も同じように。あらゆる人間の死が私をすり減らせる、何故なら私も人間の一人であるのだから。そのため、吊いの鐘が誰のために鳴っているのか知ろうと遣いを出してはならない。その鐘は汝のためにも響いているのだ。

(「瞑想 17番」)

先の挽歌同様に、“Meditation 17”の中で海は人間の命を奪うものとして扱われており、人間は大陸の一部(土壌)として海に流される。そして人類は一つの大陸を成しているのであるから、他人の死への吊いの鐘も自分自身のために鳴っていると捉えるよう促している。自他の死を区別せず、鐘の音が鳴るごとに自分の死を思うという態度は、ラテン語の警句“Memento Mori”(「死を忘れるな」)を想起させる。生と死そのものについての考察のみならず、人間が生きている間に死に対しとるべき態度についての Donne の見解が示されていると言える。Donne は生きている人間の存在も常に死と深く関わっていると考えており、それは個々人に死ぬ運命がさだめられているからとい

7 Donne の散文作品は Mueller 版から引用している。また、引用部の英単語の表記は Mueller 版に則している。

うよりはむしろ、人類が他者の死も生きながらにして共有しているためだとしている。

このように、本節では Donne の創作年に則りながら、自己と他者を重ねつつ、人間の生死を陸と海のイメージで描いている作品を書簡詩、挽歌、瞑想録の中から取り上げ、考察を行った。初期の書簡詩“*The Storm*”における自己と他者の重なるイメージは、Donne 自身が体験した海上での命の危機についての様子を、受け手である Brooke に臨場感をもって読ませるための技法であった。しかし“*An Elegy upon the Death of Lady Markham*”では、Donne 自身が陸地に居て荒れ狂う海を見るかのように視点が転換され、なおかつ陸地は生命の住む場所、海はその命を奪うものという区別が導入されている。さらに生と死の問題は友人同士のものから全人類の規模にまで拡大されている。このイメージはカトリック教徒からイングランド国教会の牧師に転身するまでの長い月日の中でも消えることは無かったと考えられ、“*Meditation 17*”の一節では Donne の宗教観の一部を表すものとして扱われている。すなわち、全人類は一つの存在なのだから他者の死を自分の死と思え、という宗教的思想を示すイメージとなっている。

## 2. 恋愛詩集 *Songs and Sonnets* における一なる存在の恋人たち

先の節では Donne の書簡詩、挽歌、瞑想録における自己と他者の存在の重なりを確認したが、これら三つの作品よりもより大々的にこの問題を扱っている作品がある。それが詩集 *Songs and Sonnets* (『歌と小唄』) における複数の恋愛詩である。川崎も Donne の恋愛詩の内、作中で描かれている恋人たちがお互いを深く愛し合っている内容のものを理想的恋愛詩とした上で、「たとえば、すでにいくつかあげた理想的恋愛詩の幾編かがほとんど例外なく含んでいる中心概念は、『二が一になる』つまり二人の恋人が二人のままではなく一人になってしまうということである。」(p.38) と述べ、“*The Good Morrow*”(「おはよう」)の14行目と20行目、“*The Canonization*”(「整列加入」)の23-24行目、“*A Valediction Forbidding Mourning*”(「嘆くのを禁じる別れ詩」)

の 21 行目、“Love’s All (Love’s Infiniteness)”<sup>8</sup>（「愛のすべて」/「愛の無尽蔵」）の 31-33 行目を例に挙げている（pp.38-40）。川崎の例の他にも、*Songs and Sonnets* には数多くの作品の中で一なる存在の恋人たちのイメージが出てくる。

この恋愛詩集には 1590 年代から 1610 年までに書かれたと考えられている 54 作品が収録されており、1631 年に Donne が亡くなって二年後に編纂・出版された。この 54 作品の内、特に 1600 年以降ごろに書かれたと考えられている作品<sup>9</sup>に、詩人とその恋人という、自己と他者が重なる着想が多く見られる。先に見た川崎が自身の説の例として挙げている *Songs and Sonnets* の作品も、この時期に書かれたと考えられている作品である。1600 年以降ということは、“The Storm”（1597?）よりも後であり、“An Elegy upon the Death of Lady Markham”（1609）と前後すると考えられる。つまりは、*Songs and Sonnets* の複数の作品は、先の章で見た Donne の思想の展開と何らかの関わりを持っていると考えることができる。例えば、*Songs and Sonnets* に収められている“A Valediction: Weeping”（「別れ詩：涙」）や、“A Valediction Forbidding Mourning”（「嘆くのを禁じる別れ詩」）は、詩の全体を通して恋人たちが一なる存在として描かれているだけでなく、航海に出かける前に悲しむ恋人に話しかける体を取るなど、自己と他者の重なりと海から脅かされる生命の不安という二点で“The Storm”と似ている。つまり、“The Storm”から“An Elegy upon the Death of Lady Markham”に至るのと同じように、二つの別れ詩も“The Storm”におけるイメージの系譜を持っていると考えられる。

ただし、先の節で扱った挽歌と瞑想録と、*Songs and Sonnets* の作品は、いくつかの点で異なっている。例えば、同じ自己と他者、命を脅かす海というイメージを持つ“A Valediction Forbidding Mourning”も、先の挽歌、瞑想録とは違い、詩人と恋人の存在が一つであるとする状態について次の説明をし

8 この作品のタイトルは Donne の詩を初めて本格的に編集した Grierson 版以降、“Love’s Infiniteness”という題が Gardner, Showercross といった編集者の版でも用いられてきた。Redpath 版では“Lover’s Infiniteness”であり、本稿が依拠している Robbins 版では“Love’s All”というタイトルになっている。

9 創作予想年に関しては、主に Robbins と Gardner, Shawcross の三人の編者の意見を参考にしている。しかし作品によって三人の創作予想年に関する意見が 5 年以上大きく異なっていることもある。

ている。

But we, by a love so much refined  
 That ourselves know not what it[absence] is,  
 (“A Valediction Forbidding Mourning” ll.17-18)  
 しかし私たち二人は、愛によって純化されているのであるから、  
 私たちはそれ（片方の不在）が何なのか分からない、  
 （「嘆くのを禁じる別れ歌」）

引用に見て取れるように、二人の存在を純化する愛が、彼らの存在を一つにしている。これは二人の恋愛という個人的で閉鎖的な絆によって存在が一つになっているということであり、先に見た挽歌や瞑想録で見られた全人類との存在の同一視とは異なる考え方である。*Songs and Sonnets* の他の作品における自己と他者の重なりも専らこの閉鎖的な二人の関係から描かれている。“

そして、*Songs and Sonnets* における自己と他者の存在の重なりと先の章で見た詩における描写のもう一つ違いは、一なる存在というイメージが、彼に様々な表現を可能にするための道具立てとなっている、ということである。先の章で見た複数の作品の中で人類の存在が「陸地」のイメージで固定化されていたのに対し、*Songs and Sonnets* の中ではそのイメージが Donne の連想ゲームを見ているかのように次々と形を変える。“A Valediction Forbidding Mourning”では、自己と他者の存在の重なりが以下のような形で表現され、これから航海に出かける詩人が恋人に悲しまないように告げる言葉に説得力を持たせている。

Our two souls, threfore, which are one,  
 Though I must go, endure not yet  
 A breach, but an expansion,  
 Like gold to aery thinness breat.  
 (“A Valediction Forbidding Mourning” ll.21-24)

そのため、私たちの二つの魂、同時に一つでもある魂は、  
 私がここから去らなければならずとも、別離に苦しむ  
 のではなく、ただ広がるということなのだ、

金が打ち伸ばされて空気のように広がるように。

(「嘆くのを禁じる別れ歌」)

この詩では恋人たち二人の存在（魂）は一つの金の塊として例えられている<sup>10</sup>。彼らの別れとは一つの金が引き伸ばされることであり、彼らの存在は一つの金における二つの端と端とされている。端と端であると言っても、それは単なる直線ではなく、引き伸ばされる金という平面図形のイメージである。また、二人の魂を価値の高い金に例えることで、恋人二人の存在価値も高められる効果がある。別れを別れと思わず、二人の関係の広がりまでを感じさせる描写である。

さらに、彼ら恋人たち二人の存在が一つであることは別のイメージによっても表現されている。

If they be two, they are two so  
As stiff twin compasses are two:  
Thy soul, the fixt foot, makes no show  
To move, but doth if th' other doe.

(“A Valediction Forbidding Mourning” ll.25-28)

もしも私たちの魂が二つならば、それらは二つだが、  
コンパスの脚が二つであるのと同じである。  
君の魂は、固定された脚で、動いているように  
見えなくとも、もう一方の動きに合わせて動いている。  
(「嘆くのを禁じる別れ歌」)

図形としての恋人たちの魂は、今度は図形を描くコンパスとして登場する。Donne は金の展性から図形のイメージへ、さらに作図の道具のイメージへと二人の魂の形を変えている。作図の道具の中でも、コンパスを選んだところが Donne の奇才ぶりを感じさせる。二本の足を持つコンパスは一つの固体

10 Donne の詩作品の中にはよく、alchemy（錬金術）についての記述が出てくるが、この alchemy の目的は金の錬成である。さらに金の錬成はこの詩を読むうえで重要な知識となる。

である。支えとなる足の恋人と、円を描く方の足の詩人との魂は二つでありながら一つなのだ。これは先のスタンザの「僕たちの二つの魂、同時に一つでもある魂」の説明にもなっている。それだけでなく、Shawcross はコンパスが円を描くことについて、“The circumscribed circle with the compass in its center was the symbol for gold, alchemically the only metal that was indestructible.”と注釈をつけ、⊙の記号を示している (p.400)。Donne は金とコンパスの緊密な関係を描きだし、さらに、コンパスの足を用いることで、二人の一なる魂を身体描写のように描き出している。

このように、“A Valediction Forbidding Mourning”という詩一つをとっても、自己と他者の重なりは金、図形、作図の道具であるコンパス、さらには錬金術と身体など、幾つものイメージで描かれている。Donne は「自己と他者の存在が一つである」という漠然とした概念を逆手に取り、自由に形を変えられるものとして扱っている。それが *Songs and Sonnets* における一なる存在の恋人たちの描写の特徴である。

他にも“*The Dissolution*”では、恋人たちが一なる存在であることが、身体と魂の両方から描かれる。そしてどちらの場合にせよ、そのイメージは詩行が進むごとに変化していく。この詩の冒頭で、詩人はまず、二人が互いの身体元素を構成していたのだと述べる。

She's dead; And all which die

To their first Elements resolve;

And we were mutual elements to us,

And made of one another.

(“*The Dissolution*” ll.1-4)

彼女は死んだ。死せるものは全て

自分たちの原初の四つの元素へと分解する。

そして私たちはお互いにお互いを成り立たせる元素であり、

もう一方を構成していた。

(「溶解」)

この詩の冒頭では“elements”という単語から、二人の存在が一つであることが身体的に描かれているということが分かる。3-4 行目は彼らが互いに唯

一無二の存在であることを示している。しかしだからこそ、二人のうち片方が死ねば、それによってもう片方も崩壊が起きるという、不安も煽っている。二人の身体は化学薬品の調合やキメラの形成のように、もはや個別存在に戻すための分割が不可能である存在として描かれている。さらに彼女の死後、詩人の体は自分を成り立たせている現在の元素の他に、彼女を成り立たせていた元素をも取り込むことになる。

My body then doth hers involve,  
 And those things whereof I consist, hereby  
 In me abundant grow, and burdenous,  
 And nourish not, but smother.  
 (“The Dissolution” ll.5-8)

僕の体は彼女を取り込んでいる、  
 僕を構成する要素たちは、彼女の死によって  
 僕の中で恐ろしく増加し、膨れ上がり、  
 結果、僕をはぐくむのではなく、僕を窒息させる。  
 (「溶解」)

詩人の体に取り込まれた彼女の元素が「恐ろしく肥大し」、そして「窒息」、つまり詩人を死へと向かわせる。Donne はあえて「はぐくむ」という、彼女の元素を含むことが有益になるかのようなイメージを提示しており、すぐ後に詩人を「窒息させる」という殺人のイメージを用いている。それも、体内で膨張を起こし窒息させる殺人である。このイメージはエレジーの“*To his Mistress Going to Bed*” (「ベッドへ向かう僕の恋人へ」)にも出てくる水腫病 (hydroptique=hydrops)<sup>11</sup> のイメージ (1.42) と極めて類似している。つまりは殺人のイメージでありながら、病死のイメージでもある。一見すると恋愛詩とは思えないグロテスクな描写である。しかし、愛し合う恋人同士だからこそ、互いが互いの元素を構成していたのである。ダンは恋愛詩には不釣り合

11 水腫病 hydrops は 1375 年に初出 (OED)。身体の組織間隙または体腔内にリンパ液・漿液が多量にたまった状態。皮下組織では外表からむくみとして認められる。水症。浮腫。水気。(『広辞苑』)

いに思える描写を、愛し合う恋人同士の身体の合一を基に、恋愛詩だからこそ可能な描写に変えている。

また、“The Dissolution”でも“A Valediction Forbidding Mourning”と同様に一つの存在である「恋人たちの魂」が出てくるが、全く別のイメージを基に描かれている。詩人は彼女の死に耐え切れず、絶望によって自死を考えるが、その時の様子を以下のように述べる。

And so my soul, more earnestly released,  
Will outstrip hers, as bullets flown before  
A latter bullet may o’ertake, the powder being more.  
(“The Dissolution” ll.22-24)

このように僕の魂は、それより速く放たれていた、  
彼女の魂を追い抜くだろう。ちょうど先に放たれた弾丸を  
火薬を一層詰められた、後からの弾丸が追い抜くように。

(「溶解」)

死によって身体から抜け出した二人の魂は、鉄砲に詰められた弾丸と喩えられている。面白い点は、先の引用で確認したこの詩の冒頭を踏まえると、二人の魂が弾丸であるのに対して、身体が鉄砲と火薬の両方に例えられているということである。この詩の冒頭では、詩人と恋人はお互いがお互いの身体を構成する存在であり、彼女の死によって彼女の身体の構成要素が分解され、詩人の身体に取り込まれた。Donneはこれを銃に火薬を詰める比喩として、詩の最後でさらに利用したのである。このように、“The Dissolution”では恋人たちの存在が一つであるという着想を基に、殺人、病死、そして鉄砲と火薬のイメージを恋愛詩の中に取り込みつつ、魂の合一を描いている。

このように、Donneの恋愛詩で見られる自己と他者の存在の重なりは、その存在が魂として扱われるもの、身体として扱われるものがある。どちらの場合にしても、Donneは恋人間の閉鎖的で、なおかつ変形自在なイメージとして、恋人たちの存在を描きだしている。Songs and Sonnetsにおけるこのような自己と他者の重なりイメージは“The Storm”におけるイメージと直接的に結びついていると考えられる作品もあるが、閉鎖性やイメージの変容性の点で、挽歌や瞑想録で発展させた陸地であり人類全体と共有する一成る

存在という固定のイメージとは大きく異なっている。

### 3. まとめ

本稿では Donne の様々なジャンルの作品に見られる自己と他者の存在が重なるイメージを取り上げ、そこにどのようなイメージが付加されており、どのような効果があるのかを考察した。その一例である、生命としての陸地と死としての海のイメージは書簡詩、挽歌、瞑想録と幅広いジャンルで用いられ、なおかつ Donne の生涯を通して宗教的な思想や態度の模索にまで深く関わっている。一方で *Songs and Sonnets* に収録された複数の恋愛詩では、愛によって恋人たちの存在が一つとなっている状態を様々なイメージで描き出し、一つの詩の中でもイメージが多様に変容している。このように、Donne にとって自己と他者の存在の重なりとは、真面目な宗教的態度に深く関わる問題であり、また恋愛詩においては様々なイメージと混ぜ合わせながら彼独自の奇抜な発想を描き出すための重要な道具立てとなっており、同じ自己と他者の重なりを扱っていながらも、前者と後者では大きく異なると言える。今後の研究課題として、Donne が何故同じ「自己と他者の重なり」というイメージを用いながらもそれに対する全く逆の詩作および宗教的態度を取るようになったのか、より広いジャンルの彼の作品や、彼自身の伝記的事実から考察していきたいと思う。

#### 引用文献・参考文献一覧

##### 作品引用文献

- Donne, John. *The Complete Poems of John Donne*. Ed. Robin Robbins. Edinburgh: Longman, 2010. Print.
- , *21st-Century Oxford Authors: John Donne*. Ed. Janel Mueller. Oxford: Oxford UP, 2015. Print.

##### 引用文献

- Bald, R. C. *John Donne: A Life*. Oxford, UK: Oxford UP, 1970. Print.
- Donne, John. *The Complete Poetry of John Donne*. Ed. John T Shawcross. New York: Anchor Books Doubleday & Company, 1967. Print.
- 川崎寿彦『ダンの世界』研究社、東京：1967年

## 参考文献

- Donne, John. *Donne the Elegies and the Songs and Sonnets*. Ed. Helen Gardner. Oxford: Oxford UP, 1965. Print.
- . *Donne's Poetical Works*. Ed. Herbert. J. C. Grierson. 2 vols. Oxford: Clarendon, 1912. Print.
- . *The Complete Poems of John Donne*. Ed. Robin Robbins. Edinburgh: Longman, 2010. Print.
- . *The Songs and Sonets of John Donne*. Ed. Theodore Redpath. Cambridge: Methuen And Co, LTD, 1956. Print.
- . *The Songs and Sonets of John Donne*. Ed. Theodore Redpath. 2nd ed. New York. Harvard UP, 1983. Print.
- Stubbs, John. *Donne: The Reformed Soul*. London: Penguin Books, 2006. Print.
- 西山良雄『憂鬱の時代 一文豪ジョン・ダンの軌跡』松柏社、東京：1990年。